オルガンバンク

音沙汰　繚

エピローグ

時は2030年。
日本は世界の最先端を行く医療国となった。
オルガンバンクの名を知らしめたのは、日本だった。

母親が死んだ日から、私は人の役に立つ事を一番に考えてきた。この制度が出来て、私は、生まれてきた罪をあがなえる気がした。

母は、女手一つで私を育ててくれた。決して裕福な暮らしではなかったし、むしろ、貧乏でいつもあちこちから借金をしているような、そんな家庭だった。しかし、少なくとも私は幸せを感じていた。母はそうではなかった。五年前、私が十五歳だったとき、母は亡くなった。パーキンソン病という病をご存知だろうか。高齢者などにも多い病気で、母はその病気によって、命を奪われた。よく知っているはずの道がわからなくなったり、人を忘れたりする。母は私を忘れてしまった。お医者様は「病のせいだ」と、おっしゃったけども、それは前々から母が私を重荷としか思っていなかったとしか言いようがなかった。なぜなら、母は私の事をひどく嫌ったからだ。死に際に、母は私の耳元で、「あなたがいなければもっと幸せだった。」と、静かに告げた。私は、母と愛人との子供だ。母が妊娠したとほぼ同時に、愛人の実の妻にも子供が出来た。愛人は、母の事を捨てた。連絡も全て途絶え、何の前触れもなく引っ越してしまった彼を見返す為に、母は私を生んだのだ。私は”要らない”子供だった。これは、母が死んだあとに母の日記からで出来た言葉だ。

身代わり制度、またの名を、肩代わり制度。これは2030年になって、日本が初めて成功させた新しい病気の直し方だ。最初の方は、病で死んだ人の臓器を病院が買い、ある臓器に障害がある人に移植していた。一番最初の例は、2030年の7月に、自宅で自殺していた、松田高斗(偽名)42歳の膵臓を、ガンを患っていた米村美樹(偽名)23歳に移植した例だった。当時は、難しい手術だったため、マスコミなどからのバッシングが多かったが、1年もたてば、庶民的なものになった。時間も1時間程度、費用も普通の治療と同じくらいになり、日本の技術は世界中で使われるようになった。しかし、問題が発生したのだ。治療する人が多くなり、臓器の数が足りなくなった。ここで出来たのが身代わり制度だ。身代わり制度は、障害・病気を持った人間の器官を、健康な人の器官と交換し、病を移し替えるというものだ。病を肩代わりしてもらう側の人間を、ギブン、与えられるといい、身代わりする側の人を、ギブ、与えると言う。もちろん、ギブは少なく、ギブンは圧倒的に多かったため、治療費は跳ね上がり、ギブには多額の謝礼金が贈られた。それによって、世界各地の難民たちが、多くのギブになった。もちろん、その中には日本人も存在した。

肩代わり出来る年齢は、20歳からだ。私は、その20歳の誕生日に、ギブに登録した。それから、一週間後に、オルガン(organ)”臓器”バンクからの連絡が来た。吉田健太という男性と、器官を交換する事になったのだ。もちろん、吉田健太というのは偽名だ。彼について教えてもらえるのは年齢と、その障害だけ。彼は、途中失聴者だ。途中失聴者とは、音声言語を取得した後に、事故や薬の副作用によって耳が聞こえなくなってしまった人の事だ。つまり、言葉を覚えた後に、耳が聞こえなくなってしまった人の事だ。彼は、13歳のときに、交通事故によって「聞こえ」を失った。その人と、私は耳の奥にある”内耳”を交換する。「これで人の役に立てる。」私は思った。

通知が来た次の日、私はオルガンバンクの本拠地にいった。私の家から5分くらいでつく。家を決める時に考慮したからだ。最後の確認の為に、意思表示書を提示し、契約書に拇印を押した。私はそれでもう、誰かの役に立ったような気がしていた。バンクの帰りに、大手電機メーカーに寄り道して、パソコンを買った。２ヶ月分の家賃もする代物だったが、オルガンバンクからもらった謝礼金で、一番いいものを買った。家に帰って早速設定をした。次の日からはインターネットも使えるまで上達した。会社でいつもキーボードを叩いているから、何となくなれているのだ。メールアドレスを決める時には一苦労した。無難に、名前と生まれた月と日の四桁の数字に使用と思ったが、あいにくの事、「chinen0604」は、使われていた。悩んだあげく、「chinen.0604」と、ドットを入れる事で妥協した。後になって、同じ名前で誕生日で。運命的じゃないか、と思

った。私だって、恋に憧れたりもするのだ。その日のうちに「chinen0604」にメールを送った。どうせ顔も知らない、赤の他人なんだから。
　初めまして。突然メールなんかしてしまってごめんなさい。私の名前は知念です。誕生日は6月4日です。パソコンを買って、メールアドレスを設定する時に、「chinen0604」のメールアドレスが使えなくなっていたので、興味本位でメールをしてしまいました。お話し出来たら嬉しいです。
送信した後に、ちょっと後悔した。ぶりっこ過ぎる、面倒くさい、礼儀知らず。まぁ、いいか。本当に友達になるわけでもないし。

メールに返信が来た時には、本当に驚いた。しかも1日空かないようなメールだ。
　こちらこそ初めまして。そちらは知念さんのようですね。僕は知念君です。こんなに珍しい名前なのに、しかも、誕生日まで一緒とは。運命を感じますね。こちらこそお話ししたいです。
相手は異性の人か。ますますロマンティックだ。しかも相手は、私に好感を持っていて、礼儀ただしそう。私はドキドキした。同時に、ギブであるという事は、絶対に伝えたくないと思った。変人だと思われるから。
　お返事、ありがとうございます。まさか本当に返事が返ってくるとは思ってもいませんでした。私は一人暮らしで、周りにお喋り出来るよう人がいないので、とっても嬉しいです。
彼からのメールの1日後に、その文面でメールを送った。
会社から帰って、パソコンのメールボックスを確認する。それは私にとって久しぶりの幸福であり、充実であり、楽しみであった。

いよいよ手術当日。幸い、メールのやり取りに耳は関係がないので、私はほっとした。あれから毎日のようにメールのやり取りが続き、彼が大の読書好きである事を知った。本に関して全く興味がなかったが、それから、本を数冊読破した。彼と話をする為だったら何時間でも頑張っていられた。麻酔を打ち、手術台に寝かせられた後は、もう眠っていた。もみあげ辺の皮膚を切って、耳の中から内耳を取り出し、交換すると言う、今の技術では簡単な手術だった。ほんの1・2時間。それだけで、私の人生は大きく変わった。麻酔が切れ、頭が痛くなりだした頃には、完全に”聞こえ”はなくなっていた。

オルガンバンクから多額の謝礼金を受け取ったが、何かを買う気にはなれなかった。あの日、パソコンを買っただけだ。迷ったあげく、全額貯金して、会社を辞めた。毎日毎日無音の日々だった。彼から届くメールだけが私の音となった。読書も以前より好きになった。1日一冊のペースだ。エネルギーの無駄として、紙を膨大に使う本は贅沢品とされていたが、私は片っ端から購入し、読みあさった。貯金が底をついたら、また仕事を探せばいい。今が幸せであるのだ。それだけでいい。

彼に、メールですんでいるところを尋ねられた。答えると、彼は家の近くの銀行で働いていると言った。私もよく利用する銀行だ。早速、お金をおろしにいった。オルガンバンクからの謝礼金を。彼の特徴は、長身で、黒髪で、いつも青いネクタイをしていると言う。見かけたら声をかけてと言われたが、はじめからそんな気はなかった。耳が聞こえないのがばれたら恥ずかしい。ギブだということがばれたら、変わり者だと思われる。そんなの嫌だった。銀行について、私は窓口の男の人を見渡した。青のネクタイを探したが、２人いた。ネームカードを見ると、渡辺さんと登田さん、どちらも長身で黒髪だ。どちらが知念か気になったが、聞くに聞けないので、そのまま帰った。また今度、用事が出来たら見に来ようと、新しく買った薄桃色のワンピースの裾を翻した。

それからは、ほぼ、毎日のように銀行の前を通った。散歩の度に青のネクタイを探した。ガラスごしでは見えにくく、彼は見つからなかった。もしかすると、知念という人は辞めてしまったのではないかとたまに不安になった。
そんな不安も私にとっては、初めてのものだった。

いつものように銀行の前を通ると、男の人に肩を叩いて呼び止められた。ずっと呼ばれていたのだろうか。補聴器があっても聞き取りずらかった。
黒のスーツに青のネクタイ、黒髪で長身。あの、優しそうな登田さんだった。
「もしかして、知念さんですか？」
手持ちのノートに、これを書いて渡してきた。
声は出していないようだった。
「ごめんなさい、驚きましたか。最近、弟の肩代わりをしたもので。」
私は何故か恥ずかしくなった。